



心の歌を奏でて

—ぐるみん— ㊦

芳田尚哉

翌朝は無事に……というか、俺たちの感覚では当たり前なのだが、荷物は無事だった。

目が覚めて、まずそれを確認した。

なんだか、気が抜けないというか、緊張続きだな……。

旅って、本来はこんなものなのかな。

こういうものが当たり前なのに、俺たちって平和な旅が当たり前だと思ってたのかな……。そう思うと、どれだけ平和呆けしてたのかって、改めて思い知らされるね。

なんだか、この旅に出てからずっと、本当にずっと思ってるね。

ハリオアマツバメも同じだったらしく、俺の荷物が無事だった事を喜んでくれた。

荷物の無事を確認した俺たちは、ウォンバットさんとハリモグラさんに挨拶しようと部屋を出る。

「あ、おはようございます」

部屋を出ると、ちょうどハリモグラさんに会った。

「おはようございます。昨日はよく眠れましたか？」

「はい、お蔭様で」

そう言うと彼は、本当によかったです、と指をあわせて喜んでくれた。

やっぱりその仕草が女の子っぽくて、今でも俺はハリモグラさんが男だなんて信じられない。

「朝ご飯の準備をしていますので、こちらでお待ち下さい」

と、昨日とは別の部屋に案内された。

そこは、どうやらダイニングキッチンらしく、入った瞬間にいい匂いがした。キッチンの方では、なにやらスープを煮込んでいるらしい。

昨日のスープを思い出して、急にお腹が減ってきた。現金なものだ。だが、誰だってあのスープを飲んでいればそう思うだろうよ。

「オカピちゃん、お腹減ったね」

な、そうなるんだよ。

「そうだな」

と、そんな会話をしながら、ダイニングテーブルの椅子に座る。

なんだか、こういうのって贅沢だな。

「おはよう」

と、ウォンバットさんがやって来た。

「おはようございます、師匠」

キッチンで料理中だったハリモグラさんが、こちらを向いて挨拶する。

「お二人もよくお休みになりましたか？」

「はい、お蔭様で」

「ぐっすりでした」

「それはよかったです。……おっ、ちょうど朝食の準備もできたようですね」

その声に、キッチンの方を見ると、ハリモグラさんが朝食を運んできてくれるところだった。

「お待たせしました」

そう言って、それぞれの前にスープとオムレツが置かれる。そして、昨日と同じくバスケットに入ったパンを真ん中に置く。ただ、昨日と違うのはスープだった。今日のスープは、少し赤い色をしている。

「一緒に置かせていただきますね」

と、なにやら見た事のないフルーツが置かれた。

「おっ、今日はドルキャオランゴか」

ぱっと見た感じはリンゴっぽいけど……なんだろう？

「はい」

ドルキャオランゴっていうんだ……。この世界の果物みたいだ。ウォンバットさんの反応からするに美味しいんだろう。

「これって、初めて見たんですけど……」

ハリオアマツバメがドルキャオランゴを指す。

「あらら、ドルキャオランゴをご存じないのですか」

「ちょっと、俺たちはここから遠い場所から来てまして……」

と、ぼんやりと誤魔化す。さすがに、別の世界からです、なんて言えないだろ。

「そうですか……。ドルキャオランゴは、甘酸っぱくて美味しいんですよ。初めてでしたら、是非この機会に食べてみて下さい」

「はい、食べてみます」

と、早速食べるハリオアマツバメ。それはそれでどうなんだろうね。

「うわっ、シャクシャクしてて、甘酸っぱくて……。なんだろう、これ。食べた感じは林檎っていうか、梨っぽいんだけど、蜜柑みたいな甘酸っぱさもあって……」

よくわからんぞ。

っていうか、その組み合わせは美味しいんだろうか。聞くだけだと、微妙な果物にしか思えないんだが……。でもまあ、美味しそうに食べてるのを見ていると、本当に美味しいんだろう。こいつの味覚は、かなりまともだからな。変なものを好むようなやつじゃない。そこは信用できる。

「オカピちゃんも食べてみなよ」

と、すすめられたので、一口だけ……と口に入れる。

シャクっという歯ごたえで、歯触りがいい。

そして、ちょっと酸っぱい味が……。その後すぐに、甘さが口に広がっていく。

これは――

「旨い」

これは想像以上の旨さだ。ハリオアマツバメの言葉だけだと、これは想像できないな。だが、旨いのは確かだ。

俺たちの世界には、この味はないだろうな。もっとも、俺が食べた事のないフルーツの中には

、似たものがあるのかもしれないけど。

「どうぞ、冷めないうちに」

と、ハリモグラさんも席に着く。

「では、食べるか」

と、ウォンバットさんがナイフとフォークでオムレツを食べる。

「うっ……」

ハリオアマツバメは、フォークとナイフに悪戦苦闘する。まあ、普段は箸で食べるからな。

「……っと、あれ？」

と、それは俺も同じだった。

普段、フォークとナイフなんか使わないから、思うように使えない。

「えっと……」

と、そんな俺たちを見て、ハリモグラさんがどうしたらいいのか戸惑っていた。

俺たちの世界なら箸をすすめるんだろうけど、この世界に……というか、少なくともこの国にはそういうものがないようだ。

「あ、普段は違うもので……」

と、俺が説明しようとした時、

「ちょっと、部屋から取ってくるね」

そう言って、ハリオアマツバメが席を立つ。

「えっと……」

あまりの事に、ハリモグラさんだけでなくウォンバットさんも戸惑いを隠せないようだ。つか、俺もどうしていいのかわからない。

そう思っていると、すぐに戻ってきた。

「はい、オカピちゃんの分」

と、渡されたのは――

「箸箱？」

それは、どう見ても箸箱だった。しかし、それにしても小さいような……。箸箱っぽいのだが、普通の箸の半分くらいしか長さがない。箸にしては短いよな……。

首を傾げていると、ハリオアマツバメはそれを開ける。

「おっ……」

中には、半分になっている箸が入っていた。どうやら、組み立てて使う箸らしい。二本に分かれているパーツを、ねじねじと繋げると、普通のお箸くらいの長さになった。

「オカピちゃんも、それ使いなよ。ってというか、持ってきてよかったよ。エコ箸って重要だね」

と、ハリオアマツバメは何事もなかったかのように、オムレツを美味しそうに食べる。

なるほど。携帯に便利なエコ箸ね。なんだか、エコブームでこういうのが流行ってたっけ。

俺も箸を組み立てる。

うん、やっぱり日本人は箸文化だよな。

ナイフとフォークが似合う食事でも、普段なら箸が使いやすい。さすがにレストランとかでは

、わざわざ持ち込んで使うのは気が引けるけど。

「それにしても、よくこんなの持ってたな」

「旅行には必要な……って。手で食べる文化の国もあるけどさ、やっぱりお箸があった方がいいじゃない」

「そりゃそうだけどな」

郷にいれば郷に従えという言葉もあるが、俺もやっぱり自分が使い慣れたものの方がいいと思う。つまり、パスタも箸で食う。これが俺たちスタイルだな。

そんなこんなで、俺たちはマイ箸で食べていると、ウォンバットさんとハリモグラさんが不思議そうにこっちを見ていた。

「それはなんですか？ なにか棒のようですが……」

「ああ、これはお箸といって、私たちの国じゃ、普通はこれを使って食べるんです」

「オハシ……ですか。その棒のようなもので……。なかなか器用ですね」

確かに、箸を使う文化ってのは器用に思えるんだろう。だけど、俺たちにすれば普通なんだよな。

「本当にあなた方は、遠い国から来られたんですね」

ウォンバットさんは、しきりに感心していた。

そんなそれぞれの文化に感心しつつ、美味しい朝食を終える。

ちなみに、ちょっと赤いスープは、酸味があって頭がすっきりするようで美味しかった。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

それから毎日、あの出会った場所を起点に、東西南北と探し回ったが、なかなか見つからない。

そして六日が経った今日、ようやく手掛かりを見つけた。

「あれって、ガラパゴスペンギンさんだね」

ハリオアマツバメが、ガラパゴスペンギンを街中で見つけたのだ。

この国に、同じ種族はいないらしいし、ハリオアマツバメが間違えるとも思えない。なにせ、微妙な種族の違いも、こいつは完璧に見分けてるからな。似ている別のペンギンって事はなさそうだ。

「ようやく見つけましたね。ひとまず、尾行しましょうか」

と、なんだか急に探偵っぽい行動になった。

俺たちは、ガラパゴスペンギンに見つからないように、そっと尾行する。

ガラパゴスペンギンは、俺たちに気付いた様子はなく、どこかの路地に入っていく。

そこは、俺たちが見た事もない場所なので、あの宿がある場所ではないだろう。

なにか用事があるようだ。

「ここは……」

その場所になにか心当たりでもあるのか、ウォンバットさんが呟く。

「どうしたんですか？」

ハリオアマツバメの質問に答えたのはハリモグラさんだった。

「この辺は、スラム街のような場所で、あまり出歩かない方がいい場所なんです。そもそも、あまり近付かない場所です」

えっ？

そんな場所を、ガラパゴスペンギンは、迷う素振りもなく歩いている。それは、ここを熟知しているからだろうか。少なくとも、初めてでも、迷い込んだわけでもないようだ。

つまり――

「かなり怪しいですね」

ウォンバットさんが呟く。

そういう場所に出入りしているとなれば、彼でなくても怪しいと思うだろう。

こうなってくると、ガラパゴスペンギン犯人説が有力になってきた。都市伝説のような噂も、急に現実味を帯びてくる。

俺の携帯、大丈夫かな……。

分解されてたりしたらどうしよう。

そんな事を考えながら尾行を続けていると、ガラパゴスペンギンは、なにかの建物の中に入った。相変わらず、外からではどういう建物なのかがわからない。

今すぐにでも、ガラパゴスペンギンが入った場所に乗り込みたいが、ウォンバットさんに肩を押さえられていて動けない。

さすがだな。俺が動くのを予想済みってか。

「様子を見ましょうか」

と、静かな声で言われると、もう動けない。はい、と答えるのが精一杯だった。

逸る気持ちを抑えつつ、俺たちは外からじっと見ていたが、やはり外からではなにもわからない。音も全く聞こえてこないのです、中の様子はわからない。

「あなた方は、ハリモグラと一緒に、ここにいて下さい」

と、ウォンバットさんがそろりと、その建物に近付いていく。

俺たちは、それをただ見ているだけだった。

「オカピちゃん、じっとしてないとだよ」

つい俺も……と行きそうになっていたのを、ハリオアマツバメに止められる。

「師匠を信じて下さい。師匠なら大丈夫です」

ハリモグラさんにも言われてしまう。

「ごめん」

「いいんだよ。その気持ちはわかるもん。私だって、自分でなんとかしようって、そう思ってるんだよ。でも、私じゃ足手まといっていうか、余計な邪魔になりそうだな」

「……俺も同じだな」

まさか、こんなに訥々と言われるとはな。しかも、ハリオアマツバメにさ。

こいつも大人になったというか、昔とはやっぱり違うんだな……。

こうして一緒にいると、成長しているんだって思い知らされる。

ウォンバットさんは、ドアに耳を当てたりしながら、中の様子を窺っていた。俺たちにできるのは、外の道を誰も来ないか見張っている事くらいだ。いかにも怪しい様子を見られたら厄介だ。

幸い、誰も来る気配はない。

路地に入る前の大通りは、人通りも多くて賑わっていたが、ハリモグラさんが言っていたように、ほとんどの人が近付かないのだろう。この辺りは人の気配がほとんどない。

そうして中の様子を探っていたウォンバットさんが、建物の周囲を調べ始める。

ここ以外の場所から、中の様子が知れないかを調べているのだろう。

しばらくして、ウォンバットさんが戻ってきた。

「やはり、外からでは中の様子はわからないようだ。これは、潜入する必要があるようだ」

「それは危険です」

ハリモグラさんが心配そうな顔で、大きな声を出す。

「静かに」

ウォンバットさんに口を押さえられ、ハリモグラさんは口をもごもごさせながら、すみませんと謝る。

「確かに、潜入は危険だ。残念な事に、中がどうなっているのかわからない。これは、ガラパゴスペンギンが出てきたら、問い詰めるしかないかもしれないが、これもまたリスクが高い。まずは、なにかしらの証拠を手に入れなければ……」

調査は前進したものの、まだ決め手には欠けるようだ。そもそも、ガラパゴスペンギンが犯人で、ここが――窃盗団のようなものがあるとして、そのアジトであるという確証もない。

限りなく黒に近いというだけだ。

「しばらく待って、その宿の場所も知っておかないとな」

そういうわけで、俺たちはしばらくここで、ガラパゴスペンギンが出てくるのを待つ事になった。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

見張りを続けていたが、結局夜になっても出てこない。

「このままお泊まりかな……」

ハリオアマツバメでなくても、そう思ってしまう。

さすがに、夜通しというのは厳しい。

「そうですね。僕はこのまま見張りを続けます。ハリモグラ、お二人を事務所へ。そして、夜食でも持ってきてもらえるかい」

「わかりました」

ウォンバットさんはハリモグラさんに指示を出す。

このまま四人で見えていても、時間の浪費だろう。

「でも、俺たちも……」

「そういうわけにはいきません。夜通しとなれば、さすがの僕も大変ですからね。お二人には、ゆっくり休んでいただいて、朝にでもハリモグラと一緒に、続きをお願いできますか。僕はその間、休ませていただきたいですし」

「……はい、わかりました」

交代で見張りをするというのがいいのだろう。

確かに、ずっと四人で見えてもしょうがない。仮になにか進展があっても、寝不足で疲れている状態では、たいした事ができない。

俺たちはそれを体感している。

思わず、旅に出た時の事を思い出す。

「オカピちゃん、そうしようよ」

「そうだな」

俺たちは、ウォンバットさんをお願いする事にして、先に事務所に戻る事にした。

「ハリモグラ、あとは頼んだよ」

「はい。……それでは、事務所に戻りましょう」

ここに残っていたい気持ちを抑えて、俺たちは事務所に向かって歩き出した。

まさにその時だった。

見張っていた建物から、誰かが出てきたのだ。

「隠れて」

俺たちは建物の蔭に身を潜める。

暗くて、誰なのかがわからない。

「ガラパゴスペンギンさんじゃないね」

「わかるのか」

思わずハリオアマツバメを見る。

光源もなく、暗くて周囲の様子がわからないってのに、どうしてそれがわかるんだ？

「シルエットが違うよ」

俺の疑問にそう答えた。

シルエットだと？ そんなのでわかるのか。

確かに、ぼんやりと見える姿は、ペンギンの形とは違う気がする。

誰も入っていないのだから、最初から――少なくとも、ガラパゴスペンギンが入る前から、あの建物の中にいたという事だ。

中から出てきた謎の人物は、俺たちがいる方に歩いて来る。

もしかして、見つかったのか？

一瞬そんな事を思ったが、どうやらそういうわけではなさそうだ。

しかし、こちらに歩いて来る事に変わりはないので、さらに路地の奥に隠れる。

出てきた人物は、俺たちに気付かないまま、大通りに向かっていった。

通り過ぎると、全員が大きなため息を吐く。

緊張した……。

生きた心地がしなかった。

「ユーラシアカワウソさんだね」

「ユーラシアカワウソ？」

「うん。さっきの人、ユーラシアカワウソさんだった」

どうやら、ハリオアマツバメは、通り過ぎる時に、それを確認したようだ。

「彼も仲間でしょうね。アマゾンカワイルカにガラパゴスペンギンにユーラシアカワウソですか……」

少なくとも、三人が関わっているって事か。

もっとも、他に仲間がいる可能性は高いのだが。

「ハリモグラ、頼みますよ」

「はい、師匠」

なにやら二人だけわかるのだろうか。それだけの会話で、ハリモグラさんがユーラシアカワウソを尾行し始める。

「予定が変わってしまいましたが、お二人は事務所に戻っていただけますか。ここは、僕たちが……」

と、そう言っている間に、また誰かが出てきた。

「おやおや、またしても予定が変わってしまいそうですね」

「こうなれば、望むところです」

「そうだね。私たちだって」

こういう状況になった以上、戻る事はできない。

疲れていないわけじゃないが、せっかくの手掛かりだ、ここで見失うわけにはいかない。

「あれって、多分だけどヤクさんかな」

「ヤク？」

また聞いた事のない名前だ。どんな動物なんだ？

ここからだ、遠目でよくわからない。

ただ、なんだか角があるってのだけわかった。

「なあ、ヤクってどういう……」

と、ヤクってどういう動物なのか、と訊こうとしていると、また誰かが出てきた。

「ガラパゴスペンギンさんだ」

やっぱり俺たちにはわからないが、ハリオアマツバメはきちんと認識できているらしい。

「これは、お二人にも協力していただく必要がありそうですね」

俺たちとしてはそのつもりだった。

ガラパゴスペンギンは、俺たちがいる方に歩いてきたのだが、ヤクは逆方向に歩き出す。

「僕はヤクを追います。お二人は、ガラパゴスペンギンをお願いします。ただし、危険ですので、尾行するだけにしてください」

「わかっています。宿の場所は、ちゃんとわかるようにしておきます」

「気を付けて下さい」

俺たちは、それぞれ尾行を開始した。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

俺たちは、ガラパゴスペンギンを尾行しているのだが、ガラパゴスペンギンは、俺たちの尾行に気付いているのか、それとも普段からそうなのか、路地をくねくねと歩いていく。そのせいで、今はどの辺りなのかよくわからない。

「オカピちゃん、今通った道、覚えてる？」

「すまん、ちょっと無理かも」

「だよねえ」

さすがのハリオアマツバメも難しいようで、俺を責める事さえしない。

「それにしても、どこに行くんだろうね」

「そりゃ、あの宿じゃないか？」

「そうかな……」

一度は大通りに出たものの、また人が少ない路地を歩いている。

人がいれば追いかけていくが、人がいないとなると、見つかる危険があって、尾行はなかなか難しい。

そもそも、俺たちは素人だからな……。

もしかしたら、本当に気付かれている可能性だってある。今はただ、気付かれていない事を祈るのみだ。

「オカピちゃん」

「おうっ」

気付かれたのか。

ガラパゴスペンギンが走り出した。

「気付かれた？」

「わからん。でも、とにかく走るぞ」

俺たちは、ガラパゴスペンギンを見失わないように走って追いかける。

ちくしょう。やっぱり、素人の尾行じゃ無理だったのか。

とにかく、追いかけるしかない。

深追いは危険だとしても、俺の携帯のためだしな。多少の危険は覚悟……って、冷静に考えると、携帯のために命を懸けるって、どうなんだろうな。

なんて、考えてる場合じゃない。

今はとにかく追いかける。

もし、ガラパゴスペンギンが、そういう窃盗団の一員だとすれば、他にも被害者がいるはずだし、俺たちがなんとかできるなら、なんとかするのがいいだろう。

ガラパゴスペンギンは、ますます人がいない場所を走っていく。

これは、完全に気付かれているんじゃないだろうか。

俺たちの足音が響いているわけだから、誰なのかはわからなくても、誰かに監視されている事はバレているはずだ。

気付いているとしたら、ガラパゴスペンギンは逃げようとしているのだろうか。

俺たちを振り切ろうとしているのだろうか。

それとも、わかった上で、どこかに誘い込もうとしているのか……。

「ハリオアマツバメ、周囲に注意しろよ」

「わかってるよ。罠の可能性が高すぎるもん」

俺が言うまでもなかったようだ。

「すまん。お前ならわかってるよな」

「当然でしょ」

それにしても、ガラパゴスペンギンはなかなか足が速い。

ほとんど全力疾走に近い状態で、既に五分は走っているんじゃないだろうか。まあ、時間は俺の感覚だけだ。

こんなに走るなんて、最近じゃなかったからな……。高校の体育の授業以来か。でも、授業でもそんなに全力疾走なんて、なかなかないからな……。

まあ、休み時間にミニバスケットをした時は、あれは全力疾走しているようなものかもな。

若かったんだな……。

つうか、最近はずっと運動不足だっただけだが。それでも、じいさんに少しでも鍛えてもらって、多少の感覚は取り戻しているのが幸いかな。あれがなかったら、もう走れてないだろう。

ハリオアマツバメは、まだまだ大丈夫そうだ。こいつは、なんだかんだで運動神経はいいんだよな。

しかも、芸術的センスもいいときたもんだ。

それにしても、ガラパゴスペンギンはどこまで走るんだ？ すげえスタミナだな。

俺は、そろそろ限界が近付いてきていた。

「オカピちゃん、頑張って」

「……お、おう……」

喋る余裕がなくなってきた。

「ほら、見失っちゃおうよ」

そう言われても、これはきつい。

足がもつれてきた。

ここまでかな……。

「蟲(ベステート)を発見せり、

はっ？

突然の声に、思わず転びそうになった。

「えっ？ アーちゃん、本当？」

まあ、蜘蛛(アラネーオ)が嘘を言うはずはないんだけどな。

それにしても、こんな時に蟲(ベステート)って……。

まあ、本題は蟲(ベステート)の方なわけで、こっちが重要なんだけどな。

俺的には、携帯も同じくらい大事だったりする。その手掛かりが目の前にあるのにな……。

「オカピちゃん、どうする？」

一応の確認だろうな。

「そんなの、蟲(ベステート)の方だろ」

そう言うしかないだろ。実際、そっちの方が重要だしな。

「本当にいいの？」

ハリオアマツバメは、俺の気持ちを察してくれているようだ。

「いいというか、しょうがないだろ。俺たちは、蟲(ベステート)を封印するために、こうして旅をしてるわけなんだし」

「そうだけど……」

「ほら、蜘蛛(アラネーオ)に蟲(ベステート)の場所を訊いて、そっちに行こうぜ」

「でも、ガラパゴスペンギンさんは……」

「そっちは、ウォンバットさんやハリモグラさんが、仲間の居所を見つけてくれるだろうし。二人を信じようぜ」

「わかったよ。オカピちゃんがそれでいいなら」

なんだか、卑怯な言い方だぞ、それ。

でも、蟲(ベステート)を発見したのに放置しておくわけにはいかない。

携帯の行方も気になるが、それはウォンバットさんとハリモグラさんを信じて、任せるしかないだろう。

本命中の本命である、ガラパゴスペンギンが目の前にいるのに、それをみすみす見逃さないといけないのは悔しいけど。

「蜘蛛(アラネーオ)、蟲(ベステート)はどの辺だ」

「ここより 青龍の方角、

青龍の方角？

「おいおい、わかるように言えってんだ。」

「オカピちゃん、行くよ」

と、ハリオアマツバメが方向転換する。

「おい、どこかわかっているのか？」

「当たり前だよ」

「マジかよ……」

「どうやら、わからないのは俺だけらしい。」

「あんなのでわかるとか、考えられないぞ。」

「オカピちゃん、東の方角だよ。そんなの常識だよ」

「……………」

「常識なのか？」

「青龍が東って、そういうのって、誰でもわかるようなものなのか？ なにかの暗号っぽいよな。」

「それにしても、東がどっちかわかるのか？」

「……………」

「おいっ！ 無言かよ。」

「もしかして、適当じゃないだろうな」

「説明するのが面倒だから」

「……本当だろうな。」

「あんなに、くねくねと角を曲がって、あちこち走ってたんだぞ。この国の人でも、いきなり東はどっちかなんて、わからないと思うんだけどな……。」

「オカピちゃん、私を信用しなさい」

「……………わかったよ」

「こうも言い切るんだから、自信はあるんだろう。どういう根拠があるのかわからないけど、とにかくここはハリオアマツバメについていくしかない。なにせ、俺にはちんぷんかんぷんだしな。」

ガラパゴスペンギンがどうなったのか気になりつつ、俺たちはハリオアマツバメ先導で走る。

そして、二分ほど走った時、目の前になにやら奇妙なものを発見した。

「おい、なんだよ、あれ……」

俺たちは、その手前で立ち止まる。

「かれこれ、結構な時間全力疾走していたので、心臓はバクバクだし、息も荒い。もう、この場に倒れ込んでしまいたいくらいだ。」

止まったせいで、余計に疲れを感じる。

……って、それどころじゃないんだって。

「どう見ても蟲(ベステート)だね」

それは、この国の人という事はなさそうな姿だった。

哺乳類から魚類まで、様々な姿をしているが、昆虫の姿をしている人はいない。――それが蟲(ベステート)の目印だと考えていた。

事実、目の前のそれは、分類では昆虫に属するだろう。

ぷにぷにとした容姿で、なにかの幼虫のようにも見える。

ただ、普通の幼虫と異なるのは、それは真っ黒だという事と、非常識に大きいという事だ。どう見ても、四メートルくらいあるだろう。

パッと見た限り、蜘蛛(アラネーオ)よりも大きく見える。

それが、体を伸縮させて、建物の壁を上っているのだ。

どう見ても、普通の人がとる行動ではないだろう。

普通に考えて、壁を上るなんてあり得ない。

「ハリオアマツバメ、蜘蛛(アラネーオ)を」

「うん」

俺も風伯を抜く。

トロリーバッグなどは、ウォンバットさんの事務所に置いてきたが、これだけは忘れるわけにはいかないからな。

それにしても、その大きさも相まって、なかなか気持ち悪い。

芋虫というか、尺取虫というか……。

とにかく、なにかの幼虫だよな。

ハリオアマツバメは、オープンフィンガーグローブを外し、蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

「アーちゃん、よろしく」

「承知した、」

蜘蛛(アラネーオ)は、シャカシャカと蟲(ベステート)に迫っていく。

しかし、蟲(ベステート)はそれを気にする様子はなく、ひたすらに壁を上っている。

「アーちゃん、蟲(ベステート)を捕獲して」

「承知した、」

蜘蛛(アラネーオ)は壁に取り付いている蟲(ベステート)に覆い被さり、糸で絡めとろうとする。

もしかしたら、今回は楽勝かも。

蟲(ベステート)は壁に取り付いているだけで、なにも攻撃をしてこない。

これなら、俺の出番はないかもしれないな。

「ハリオアマツバメ、これは楽勝かもな」

「そうかもしれないけど……油断できないかもよ」

そうだろうか。

俺には楽勝にしか思えない。

ほら、蜘蛛(アラネーオ)が糸で……。

「えっ？」

蜘蛛(アラネーオ)が糸で蟲(ベステート)をぐるぐる巻きにしているのかと思いきや、蜘蛛(アラネーオ)はぼとりと壁から落とされた。

壁を見ると、蟲(ベステート)が体を起こすように、壁に垂直になっている。

そして、その口と思われる場所から、黒い糸を吐き出し、自らを覆い始める。

「なんだ、これ……」

まさか、これがこの蟲(ベステート)の攻撃なのか。

「アーちゃん、大丈夫？」

落下した蜘蛛(アラネーオ)に駆け寄る。

「問題ない しかし あの糸は危険 不用意に接近不可能、
……どういう事だ？」

蜘蛛(アラネーオ)が接近できないって……。

「どうしよう……」

「四刀の所有者よ 彼の糸を切断せよ、

「……………」

突然の言葉に固まってしまった。

「えっ？ 俺？」

思わず、間抜けな声で、自分を指さす。

「四刀 風伯をもって 彼の糸を切断せよ、

どうやら間違いじゃないらしい。蜘蛛(アラネーオ)は、俺にあの糸を斬れと。ただの糸ならともかく、蜘蛛(アラネーオ)が危険だと感じる糸だろ？ そんな糸をどうやって斬るんだよ。

「オカピちゃん、頑張って」

ハリオアマツバメが俺を見る。

「だけだよ……」

「オカピちゃんしかできないんだよ」

そりゃそうかもしれないけどな……。風伯を抜けるのは俺だけだ。

そもそも、こういう役目でもない、俺の存在意義がないくらいだしな。

かといって、この状況はどうなんだ？

蜘蛛(アラネーオ)が躊躇する状況なんだぞ。

本当に、俺が近付いても大丈夫なのか？ そもそも、俺にできるのか？

……どうしたらいいんだ？

そうだよ。蟲(ベステート)は壁に張り付いてるんだぞ。

俺は壁を這い上るなんてできないんだぞ。

「準備はよいか 四刀の所有者よ 我に乗れ、

そう言うなり、蜘蛛(アラネーオ)はしゃがむようにして、俺が乗れるようにしてくれる。

「……………」

そうきたか。

だけど、それしかないだろうな。

蜘蛛(アラネーオ)に乗れば、足場はなんとかなる。そうして、俺があの糸を斬る……と。

しょうがない。やるしかないのか。

こうして、俺が悩んでいるというか、迷っているというか、戸惑っている間にも、蟲(ベステート)は自らの体を黒い糸で覆っている。そろそろ、全身を覆い尽くすだろう。

覆い尽くしたらどうなるのわからないが、なんとなく蛹のようだなとはわかる。

蟲(ベステート)の外見は、確かに幼虫のようだった。だとすると、やっぱりあれは蛹になろうとしているのか？

だとしたら、かなりまずいんじゃないか？

昆虫だって、幼虫から成虫になったら、色々と大きくなったり、厄介になりそうだな。

確証はないが、最悪の事態だけは避けたい。

「蜘蛛(アラネーオ)、頼む」

俺は蜘蛛(アラネーオ)の上に乗る。

「了承した、

俺が乗ると、それを待っていた蜘蛛(アラネーオ)は、ゆっくりと立ち上がる。

「うおっと」

ゆっくりでも、やっぱりなかなか怖い。

前にも乗ったが、慣れるようなもんじゃないよな、これって。

だいたい、三メートルつったら、二階のベランダとか、そんなもんだろ。高さだけならともかく、不安定な足場だから怖いっての。

そんな状態だという事を理解しているのか、蜘蛛(アラネーオ)は糸を俺の体に巻き付けてくれていた。まさに命綱だ。

それでも怖いっての。

俺は蜘蛛(アラネーオ)にしがみつくのだが、そもそもしがみつかる場所がない。それでも、落ちないようになんとかする。

「う、うおって……」

蜘蛛(アラネーオ)は、壁を上り始める。

重力に逆らう方向になると、さすがに支えられない。

蜘蛛(アラネーオ)の命綱の糸にぶら下がる状態だ。

すげえ格好悪いよな。

でも、人間は壁に垂直には立てないんだ。

「四刀の所有者よ 繭を切断せよ、

おうよ、とでも言って、さくっとできればいいんだろうけど、この状態じゃ無理だ。

っていうか、やっぱりあれって繭だったのか。

「私の 脚を 支えにせよ、

蜘蛛(アラネーオ)はそう言ってくれるものの、簡単にできるかっての。

それでも、なんとか蜘蛛(アラネーオ)の脚に手を掛け、脚を掛けて、ようやく繭に届くようになった。

「なんとかするか」

本当に俺に斬れるのかわからないけど、それでも斬るしかない。

「うおりゃあっ！」

風伯を大上段に振りかぶって、力任せに振り下ろす。

「うっ」

繭の堅さと、足場の悪さでふらついて、蜘蛛(アラネーオ)から落ちそうになる。

「……とっと」

蜘蛛(アラネーオ)の糸でなんとか落ちる事だけは免れた。だけど、やっぱり思うように風伯を振れない。

それに、繭が堅くて風伯では斬れない。

まあ、じいさんにそんな事を言えば、刀のせいにするんじゃないと怒鳴られるだろう。実際そうなんだろうな。今の俺は、風伯の本当の力を出し切れてないんだろうな。

「オカピちゃん、頑張って」

地上から、ハリオアマツバメが声援を送ってくれる。

「お、おう……」

情けない返事だな。

ふらふらになりながら、もう一度風伯を振り下ろす。

「くっ……」

やっぱり弾かれる。

「四刀の所有者よ 四刀の力を解放せよ、

「四刀の力を解放？ なんだよ、それ」

「四刀の所有者たる者 四刀の能力を解放させよ、

なんだよ、それ。

つうか、そんな能力ってあるのかよ。

まあ、伝説の刀らしいから、そういうとんでもない能力があっても不思議じゃないんだけどな。

でも、じいさんはなにも教えてくれなかったし……。そのじいさんは、これを抜く事もできなかったわけだけど。

とにかく今の俺には、その風伯の本当の能力とやらは使えない。

だとしたら、今出来る事をするだけなんだが……それが、こうして振り下ろす事くらいなんだよな。

ふらつきながら、何度も何度も風伯を振り下ろす。

一撃勝負が無理なら、数でなんとかするしかないだろう。

どんな小さな攻撃だって、何度も繰り返せば、有効になる事だってあるはずだ。っていうか、そう信じたい。無駄な足掻きにならないようにしたい。

「くっ！ はっ！」

何度も何度も振り下ろしていると、さすがに腕が痛くなってくる。

風伯だって、真剣なわけだからそれなりの重さがある。これがまた重いんだ。慣れれば、そして鍛えればそうでもないんだろうけど。

「ふんっ！ やっ！ はっ！ んっ！」

「オカピちゃん、頑張ってる！」

ハリオアマツバメの声援を受け、俺は全力で風伯を振り下ろす。

「四刀の所有者よ 心を澄ませよ、

はあ？

どういう事だ？ 心をスマセ？

「なあ蜘蛛(アラネーオ)、どういう事だ？」

「雑念を捨て 心を澄ませ ただ風を放て、

心を澄ませるってか。

まあ、じいさんにもよく言われてたっけ。

雑念を振り払い、ただ刀にのみ集中する。そして、刀が本来持つ能力を全て引き出そうとする。

じいさんの言う事も、戯れ言じゃないわけだよな。実際、こうして役に立つわけだ。

そりゃ、修行中は鬱陶しいだけなんだが、ちゃんと意味があるんだな。

「わかった。やってみる」

ゆっくりと、目を閉じる。

敵は攻撃をしてこない。

じっとしている相手だから、防御は無視しても大丈夫。

だから、攻撃にだけ集中する。

その攻撃も、この必殺の一撃に集中すればいい。

なんだか、本番じゃないみたいだ。練習にしか思えない。

訓練は本番のように、本番は訓練のように。

「なあ、もうちょっと足場をなんとかできないか？」

集中していても、やっぱり足場が不安だ。これじゃ、思うように踏ん張れない。

「もうちょっとだけ、広くできればありがたいんだが」

「了承した、

蜘蛛(アラネーオ)は、自らの脚と建物の間に糸を張る。

「利用せよ、

そこには、糸で見事な足場が作られた。

大丈夫なのか？

さすがに糸なので不安が残る。

恐る恐る足を乗せる。

「うおっ」

乗せた瞬間、少し撓んだが、意外に丈夫らしい。

「おっ、これならなんとかなりそうだ。ありがとな」

「四刀の所有者よ 繭を破壊せよ、

「ああ、してやるさ。蜘蛛(アラネーオ)がこれだけしてくれたんだからな」

ここまでしてもらったんだ。

これでできないなんて、言い訳のしようもない。それは、俺が無能だって証明になるだけだ。

役立たずにはなりたくない。

俺は、この旅に必要な存在でありたい。

だからこそ、俺の力が求められている今、俺は全力でそれに応えなきゃいけない。

もう一度目を閉じる。

そして、頭の中を空っぽにする。

ただ、目の前の繭を斬る。

風伯の力を感じる。

風伯——風の主たるその刀。

風を感じる。

風伯が風を纏う。

風が渦巻いてく。

風が俺を包んでいく。

そして——風が止んだ。

「斬り裂けえっ！」

風を受けて、風を感じて、風を纏って、風伯を振り抜く。

うおっ！ なんだこれ。

今までにない感じだ。

思わず、俺自身が吹き飛ばされそうになる。

それでも、なんとか踏ん張って堪える。

蜘蛛(アラネーオ)に足場を作ってもらってよかった。蜘蛛(アラネーオ)の脚の上だったら、間違いなく落ちてるよな。

俺が振った風伯からは、かまいたちのような風が。それが、繭に当たる。

「やったか？」

「脆弱なり 強力な風を放て、

確認する前に、蜘蛛(アラネーオ)にそう言われて、思わず落ちそうになった。

目の前の繭は、確かになんともないようだ。

「ちくしょう……」

伝説の刀の力をようやく使えたと思ったのにな……。

それなのに、結果はこれかよ。

もっとも、偶然使えたようなもんだし、これが脆弱だってんだから、本当はもっと強力なものなんだろう。

潜在的な力を引き出せない、それは俺が無力だからだ。

「俺には、やっぱりできないのか……」

「四刀の所有者よ 再び斬れ、」

「俺には無理なんだよ。蜘蛛(アラネーオ)だって見ただろ。無理だったじゃないか」

「再び斬れ、」

「俺には、この風伯を使いこなせないんだ。やっぱり、俺じゃ……」

「再び斬れ、」

蜘蛛(アラネーオ)はそればかりを繰り返す。

「だから無理だって。俺じゃ無理なんだ。俺は役立たずなんだよ」

「四刀の所有者よ 自らを信じよ 四刀に選ばれし所有者たる者 四刀が認めし者 自らを信じよ、」

「……………」

これって、励まされてんのか？

いや、どっちかってえと説教されてるんだらうな。

「……すまん。風伯は俺を選んだんだよな。風伯が選んで、認めてくれたのに、それなのに、その俺がこんなじゃな……」

「四刀の所有者よ 再び斬れ、」

「わかった。わかったよ。何度でもやってやる」

一度でダメなら、何回も斬ればなんとかなるかもしれない。

そうだよ。さっきは、小さな攻撃だって数でなんとかしようとしてたじゃないか。

こんな短時間で忘れてたぜ。

俺が役に立つって証明しないとな。

そのためには、何度でもさっきのを打ち込むんだ。

「ありがとな」

「……………」

言葉なんかいらない。心で受け取ったぜ。

ゆっくりと目を閉じる。

そして、ゆっくりと呼吸をする。

風を感じるんだ。

俺だけじゃない。

風伯で風を感じる。

風伯の刀身で斬るんじゃない。風伯が纏った風で斬るんだ。

何度でも何度でも斬り裂け。

あの繭をズタズタにしてやるんだ。

「いっけえっ！」

風伯を右下から袈裟に斬り上げる。

「再び斬れ、」

「おうよ」

そのまま、返すように右上から袈裟に斬る。

今度は左下から。

そして左上から。

何度も何度も。その度に全力で。風を受けて。

刀身を当てるのではなく、風伯に纏わせた風を放つイメージで。

「はっ！ ふんっ！ くっ！ はっ！」

ちくしょう。どうして斬れない。

これだけ斬ってるのに、繭は平然とそこにある。

ったく……やってらんねえぞ。

無駄骨っていうか、徒労っていうか……。

ちゃんと成果がないと、やる気ってのはなくなっていくもんなんだよ。

「くそったれえっ！」

大上段に風伯を振り下ろす。

〴〵後は任せよ、

ん？

目の前の繭は、さっきと変わらない。

だが、蜘蛛(アラネーオ)は任せろと言った。

蜘蛛(アラネーオ)にとって、この繭の糸は危険なものじゃなかったのか？

「あっ……………」

そう思った時、目の前の繭が――繭の糸がはらりとほどけていく。

所々で切れた糸は、はらはらと地面に落ちていく。

「これって……………」

俺が斬ったのか。

風伯の攻撃が、ようやくこうして繭を……。

それをきっかけに、繭はボロボロに崩れていく。

「やった……………」

俺はついにやったんだ。

〴〵四刀の所有者よ 我に乗れ、

「お、おう」

反射的に、蜘蛛(アラネーオ)の脚に乗る。

「うおっと」

乗った瞬間、さっきまで足場に使っていた糸を切り離す。

そして、少し繭から距離をとる。

〴〵振り落とされぬよう 留意せよ、

そう言うなり、蜘蛛(アラネーオ)はカシャカシャと動き出す。

「う、うあっ、っと……………」

なんとかしがみついたが、危うく振り落とされるところだった。

文句を言いたかったが、どうやらそれどころでもないようだ。

蜘蛛(アラネーオ)は、繭から出てきたものに、糸を吐きかける。

「うわっ、なんだ、あれ」

繭と糸の間から見えたそれは、どんな生き物にも例えられないような姿をしていた。

出来損ないの体だ。

どろりと溶けたような、そんな奇妙な姿をしている。

しかし、その背中であろう部分には、これから翅になろうとしていたと思われるものがあった

。

やっぱり、成虫になろうとしてたんだ。

ゝ資格者(ティトーロン)よ 我に命じよ、

今度は下にいるハリオアマツバメに言う。

「蜘蛛(アラネーオ)よ 蟲(ベステート)を食らえ」

ゝ了承した、

蜘蛛(アラネーオ)は、その命に従い、糸でぐるぐる巻きにした蟲(ベステート)を食べ始める。

ぬちょぬちょという音が、すぐ近くにいる俺には聞こえてくる。

うっわあ……。あんまりいい音でもないんだよな。むしろ気持ち悪い。

耳を押さえて聞こえなくなるようなものでもない。つうか、距離が近すぎる。

そんなお食事の音をたっぷり聞いて、ようやく俺は地上に戻る事ができた。

「アーちゃん、お疲れ様」

その声が合図だったように、蜘蛛(アラネーオ)はハリオアマツバメの左手に戻っていった。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「オカピちゃんもお疲れ様」

「あ、ああ……」

本当に疲れたっての。

体力的には、腕が棒のようだ。なにも感じないくらいだ。それでも、痛いんだけど。感じるのか、感じないのか、自分でもよくわからない。

それに、精神的にも疲れた。なにせ、あの捕食の音をずっと聞いてたわけだからな。あれは精神的につらい。

「本当にすごかったよ。なんだか、風がびゅんびゅんってなって、繭の糸がはらはらってなっていくんだもん」

俺の感覚とは違うようだが、地上からだとそうだったんだろうか。それとも、ハリオアマツバメが誇張してるんだろうか。

「だけど、あんなの偶然に近づいて。あれを自由に使えるように、もっと強力でできるようにしないと……」

「じゃあ、これから修行する？」

修行か……。

山籠もりとか？

それもいいかもしれないな。でも……。

「でも、今はそんな余裕はないだろうな。蟲(ベステート)は待っちゃくれないし」

「そうだね」

「こればかりは、蟲(ベステート)と闘いながら、出来るようになっていくしかないんだろうな」

これが一番効率がいいんだろうけど、一番難しい事でもある。

もっと、じいさんに修行をつけてもらっとけばよかったな……。

いつでも対応できるように、常に準備だけはしておけて、時間は待ってくれないって、言われてただけだな……。こういうのって、その時にならないと実感できないんだよな。

「疲れた……」

「そうだね。でも、忘れちゃダメだよ。オカピちゃんの携帯を探さない」と

「……………そうだった」

完全に忘れてた。

俺の携帯を探してるんだった。

その容疑者として、ガラパゴスペンギンを追いかけてて、蟲(ベステート)の気配があってそれを諦めて……。

「ああ、ちくしょう。宿の場所がわからないじゃねえか」

「オカピちゃん、なんとかなるよ。ウォンバットさんと、ハリモグラさんが、ヤクさんとユーラシアカワウソさんを追いかけてるから、手掛かりをつかんでくれるよ。

「そうだな。あの二人なら、なんとか……………って、ここどこだ？」

「……………わかんないね」

ハリオアマツバメは、てへへと笑う。

「マジかよ……」

ガラパゴスペンギンを追いかける時は、必死だったから道がわからないし、ここへは蟲(ベステート)の気配からだったので、もっとわからない。

さて、俺たちはどこへ行けば、ウォンバットさんとハリモグラさんに会えるんだろう。

待ち合わせは決めてなかったが、事務所に行けば大丈夫だろうけど、その事務所の場所がわからない。

誰かに訊けばいいのか？

でも、わかるのかな……。

「とにかく、歩こうか」

よっとハリオアマツバメが手を引いてくれる。

「そうだな、行こうか、ハリオアマ……………あっ」

ごしごしと目をこする。

「どうしたの、オカピ……………トールちゃん」

「キヨカ。戻ったな」

どうやら、蟲(ベステート)がいなくなった事で、この世界の異常が解消されたようだ。

目の前にいるキヨカは、今までのハリオアマツバメじゃなくて、以前からの人間の姿に見える

。

どうやらキヨカからも、俺の姿がちゃんと見えているらしい。

「よかったね。……まあ、ずっとあのままでも面白かったんだけど」

「面白いっちゃ面白いけどな……」

別に、外見だけで、実生活に支障はほとんどなかったわけだし、あのままでも問題はないんだけど、やっぱり俺にはこっちの方がいい。

「ねえねえ、トールちゃん」

キヨカは嬉しそうに……というか、なにやら企んでいるかのような顔で俺を見る。

「なんだよ」

「あのさ、私たちが戻ったって事はだよ。この国の人たちも、元の姿で見えるって事だよね」

「ああ、そうだな」

そりゃそうだろう。俺たちだけが戻るなんて、それこそないだろう。

「じゃあさ、ウォンバットさんとハリモグラさんの、本当の姿が見れるんだよね」

「なるほど……。そうだな」

この国の人たちって、どんな姿なんだろうな。よく考えれば、俺たちはこの世界の人たちをまともに見た事がない。

この国に来た時には、もう今の着ぐるみの状態だったからな。

さすがにあれが普通じゃないのは、俺たちが元の姿で見える事からわかる。

ウォンバットさんとハリモグラさんか……。

ウォンバットさんは、あの渋い声からして、ダンディな感じなのかな……。

ハリモグラさんは……想像できない。

声だけだと、完全に女の子だろ。でも、男なんだよな。

うっわぁ……気になる。

「でも、ここがどこかわからないしね……。それに、元の姿だったら、ウォンバットさんとハリモグラさんがわからないね」

ん？ どういう事だ……って、そうか。

俺たちが知ってるのは、あくまでも着ぐるみの姿だ。本当の姿を見た事はない。

でも今は、蟲(ベステート)の影響がなくなって、元の姿にしか見えない。

「どうするんだよ」

とにかく、事務所に行けばわかるのか。

あの場所さえわかれば、そこにいるのがウォンバットさんとハリモグラさんだ。

「とにかく、事務所に行けば大丈夫だろうけど……」

キヨカも同じ考えらしいが、なにやら煮えきらない様子だ。

「どうしたんだ？」

「わたしたちはそれでわかるかもだけど、向こうも私たちの本当の姿を知らないんだよね。そんな私たちが行ったら、新しい依頼人だと思われるだけだよ」

「なるほど……。そういう事か。でも、ちゃんと説明すればいいんじゃないか？」

「それで大丈夫かな？」

「大丈夫じゃないのか？」

「そうだね。大丈夫だよ、きっと」

ようやくキヨカは納得したようだ。

俺たちが依頼人だって、ちゃんと説明すればいいだけだろ。姿が違って、そもそも依頼は、俺たちしか知らないわけだし。

でも、なんだか緊張してきたな。

「その前に、どうやって戻るかだよ」

「……………そうだな」

最大の問題はそこだ。

俺たちは、完全に迷子だ。

どこに向かえばいいのかわからない。

いつも出発点にしていた場所にたどり着けばなんとか戻れるけど、その場所もここからどうすれば行けるのかわからない。

とにかく、適当に歩こうという事で意見が一致。人が多そうな場所を目指す。大通りならなんとかたどり着けるだろう。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

とぼとぼと歩くこと小一時間。ようやく、人が多い場所に出る事ができた。

ガラパゴスペンギンを追いかけていた時、ほとんど……ってというか、全く誰にも会わなかったわけだから、よっぽど人がいない地区を走っていたんだろう。

そのせいで、俺たちも人の姿を見るまで、それなりに時間を要した。

でも、逆に考えれば、人がいなかったお蔭で、蟲(ベステート)と闘っていた時、誰も巻き込む事がなかったわけか。それに、目撃者もないようだし。

別に見られても問題ないんだけど。

「うっわあ……」

「こういう人たちだったんだ」

この国の人たちは、別に亜人間というわけじゃなかった。

普通に、見た感じは俺たちと同じ姿をしている。

ただ服装が違う。

なんだか、地味というか……。ちょっと黄色っぽい、綿のような素材の服で、特に凝ったデザインがあるわけでもなく、みんな同じような姿にしか見えない。下は男はズボンのようなもので、女性はスカートっぽい人もいれば、やはりズボンのような人も。

でも、みんなが同じようなものを着ている。

そんな中で、俺たちは完全に浮いた存在だ。

別に派手な服装だというわけじゃない。

たとえ黒でも、この場では浮いたものになる。

そもそも、色があるものは浮いた存在だ。

さて、これでますます誰だかわからなくなった。

「それにしても、なにも騒いでないね」

「騒いでって……そうか」

元の姿に見えるようになったんだ。

普通は、戻ったとか、喜ぶなりするものだろう。なにかしらの反応はあるはずだ。

それなのに、なんの反応もない。

まるで、なにも変わっていないみたいだ。

「やあ、ミミズクさん」

「おお、カンガルーさん、こんな時間にどこに行くんだい」

そんな会話が聞こえた。

「どうなってんの？」

「さあ？」

俺にも理解できない。

俺たちの目の前にいるのは、もう着ぐるみ姿じゃない。言ってしまえば、ただのおっさんだ。

その二人が、今までのように呼びあっている。

もしかして、この国の人たちって、元々そういう名前なのか？

「この国の民は 蟲(ベステート)の影響下にすぎた そのせいで すぐには戻らず、急に声が出たので、さすがのキヨカも驚いた。

「もう……びっくりだよ」

なるほど……。

俺たちは、まだ日が浅かったし、そもそもこの世界の人間じゃないから、すぐに戻ったのか。だけど、この国の人たちは……。

「でもアーちゃん、いつかは戻るんだよね」

「時を経れば戻る、

「じゃあよかったよ。……でも、まだあんな姿に見えるんだ……。ちょっと羨ましいかも」

「おいおい、あれは変な状態だったんだぞ」

「わかってるよ。でも、トールちゃんのオカピは可愛かったよ」

「……………ってというか、オカピってなに？」

「あれ？ トールちゃん、オカピ知らないの？ 誰でも知ってるよ」

「知らねえよ、普通は。なんだよ、それ」

「そんな事ないと思うけどな……」

「知らん」

「えっとね……。馬みたいな胴体で、脚はシマウマで、顔はキリンみたいな感じかな」

「なんだ、それ。キメラみたいだな」

「そう言われればそうだね。でも、ちゃんとした動物だよ」

オカピの正体というか、姿の説明を聞いて、なんだか俺がそんな姿だったんだと思うと微妙だ

。実際の姿と、俺が想像している姿が違うのかもしれないけど、聞く限りだと複雑な気持ちだ。俺たちは元々異邦人なんだが、俺たちだけ違う光景が見えている今、まさに異邦人だよな。とにかく、今はこの人通りが多い通りを、俺たちが来たであろう方角に向かって歩くだけだ。どの建物も同じに見えるので、目印になりそうもない。

やっぱりこの国の人には、まだ動物の着ぐるみ姿に見えるらしく、そこかしこでそう呼びあっているのが聞こえてくる。

それにしても、いわゆるゲームとかでしかないと思っていた、ファンタジーの世界なんだよな

。魔法とかあるのかな……。

ドラゴンなんかもいたりして。

ちょっと、そういう期待もあるんだけど、これまで生活してきた中では、それらしいものはない。

いや、あったな。

新聞のようなもので、`龍神官、とかそういう感じの言葉があった気がする。

この国の事じゃなかったみたいだけど、この世界にはそういうものがあるという事だ。

まともな地図がなさそうなので、この世界がどういうものなのかわからないけど、そういう存在があるなら、期待してもいいかもしれない。まあ、龍を神として信仰しているだけかもしれないけど。

それでも、期待くらいしてもいいだろ。

ひたすら歩いていると、

「あ、ハリオアマツバメさんとオカピさん」

そんな聞き慣れた名前が。

声の方を見ると、遠くの方で小さな女の子……のような子が、ぴょんぴょん跳ねながら手を振っている。

「あれって……」

「きっと、ハリモグラさんだね」

だよなあ。

あれが、彼の本来の姿なのか。

っていうか、やっぱり俺には女の子にしか見えないんだが。

本当に男……なんだよな。

「ハリモグラさんって、すごく可愛いね。男の娘って感じだよ」

「……………」

可愛いのはわかる。だが、それが男の子って感じなのか？ まあ、小学生くらいの男の子だったら、可愛いって表現もあるかもだけど……。ハリモグラさんって、俺たちとたいして変わらない歳じゃないのか？ 多分だけ。

「じゃあ、あの隣にいるダンディな人が、ウォンバットさんかな？」

確かにハリモグラさんと思われる隣には、背の高い男の人がいるが……ダンディか？ まあ、口髭はあるけど、結構スツとした感じの人だけだな。まだまだ若いぞ。

「とにかく行こうよ」

「ああそうだな」

キヨカの意見にはなかなか賛同できない。

なんだか、着ぐるみの姿の時の方が、意見の一致が多かったな……。

なんだか、むずがゆい感じだが、今はあの二人の所に急ごう。

俺たちは、ウォンバットさんとハリモグラさんと思われる人たちの方に走っていく。

「無事でよかったです」

近付くと、ハリモグラさんらしい人が、満面の笑みで喜んでくれた。

しかし……やっぱり女の子に見える。

「無事でなによりだ。それで、早速だが、ガラパゴスペンギンの行き先はわかったかい？」

そうだった。俺たちは尾行に失敗したんだった。

「それが……見失っちゃいました」

キヨカと俺はぺこりと頭を下げる。

「いやいや、謝るような事ではないよ。君たちは素人だ。そもそも、なにもなく無事に戻ってこ

れた事が素晴らしい」

「でも、手掛かりが……」

「それなら大丈夫だ。最初は異なる方に向かっていたヤクと、ユーラシアカワウソだったが、途中で合流したよ。そして、同じ場所に向かっていった。ガラパゴスペンギンは来なかったが、やつらのアジトはわかった。明日は保安局の協力を得て、乗り込もうと思う」

「でも、保安局は……」

あんな体たらくな組織に頼っても大丈夫なんだろうか。

「確かに、これまでの事を考えれば信用できないかもしれないね」

ウォンバットさんは、俺の心を読んだかのように答える。

「だが、保安局にも、僕が信用している者がいてね。それに、今回は人数が必要だ。数で圧倒しておくべきなんだよ」

なるほど。

少人数で向かって、返り討ちにあう可能性が高い。そもそも、相手の正確な人数がわかっていないんだから。

「わかりました。ウォンバットさんを信じます」

「ありがとう。……今日は、事務所に戻って休もうか。こちらも、準備が必要だからね」

はい、と返事をして、俺たちはウォンバットさんの事務所に戻る事にした。

アジトがわかっているなら、今すぐにでも乗り込みたいけど、正直今の俺は疲れきっていた。今から乗り込むとか言われても、そんな体力はない。

既に腕は筋肉痛だ。それに、腰のあたりも痛いし、太股のあたりも痛い。背中もだし……って、全身が痛かったりする。

「それにしても、なんだか変な感じだね」

「ん？ なにがだ？」

「だって、私たちには普通の人に見えるのに、ウォンバットさんとハリモグラさんって呼んでるんだよ。私たちだって、ハリオアマツバメとオカピって呼ばれてるし」

「まあ、そうだな」

確かに違和感がないとは言えない。

「でもさ、そういうあだ名だと思えばいいんじゃないか？ ほら、インターネットの掲示板だとき、ペンネームっていうか、そういう名前があるだろ」

「ハンドルネームね」

「そう、それ。そういうもんだと思えばいいじゃないか」

「そうだね。ネットだと、本名じゃなくて、そういう名前呼びあうもんね。オフ会だって、本名知らずに、そういう名前呼びあうんだろうね」

「そうだろうな」

そういうのに参加した事がないから、実際のところはどうかわからないけど。

でも、本名を名乗らずに過ごせる、本当の自分じゃない自分でいられる事をよしとするなら、そういう会合もいいのかもしれないな。

ある種の仮面舞踏会って感じか。あれも、顔を隠しての社交だもんな。

などと、くだらない事を考えていると、事務所に到着した。

「僕は、これから保安局の知り合いに連絡して、準備を整えておきますので、お二人はゆっくり休んで下さい。ハリモグラも、明日に備えて休みなさい」

「でも、師匠……」

「万全にしておくのも、大事な仕事だ。今のまま、無理をしてもいい結果にはならないだろう」

「……わかりました」

ハリモグラさんは少し悔しそうだが、ウォンバットさんの指示に従う。

それにしても、しょぼんとした姿は、ますます女の子に見えるな。

でも、本人が男だって言うし、キヨカもウォンバットさんも男に見えてるようだし……なんだか、納得できないが、そうだというならそうなんだよな。

なんだか、もやもやする。

とにかく寝よう。

明日は、俺の携帯を取り返さないといけないからな。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

朝食を食べた俺たちは、ウォンバットさんに先導されて保安局に向かった。

俺たちは、全ての荷物を持っていた。

蟲(ベステート)を捕獲した今、本当ならこの世界にいる理由はない。むしろ、すぐにでも出発しないといけない。

だけど、俺の携帯という問題がある。これを放置して、別の世界に向かえるわけがない。

ウォンバットさんにも、荷物を持っていく理由を訊かれたので、正直に本来の用件が終わったので、携帯を取り戻したらすぐに出発する旨を伝えた。

ハリモグラさんは、とても残念がってくれた。

保安局にはいい印象がなかったのだが、着いてみるとその印象が変わった。

あの閑散とした保安局と同じとは思えない光景だった。

保安局がある建物の前には、なにか警棒の長いようなものを携え、最低限の防具を身に着けた人たちが並んでいた。

「やあ、ウォンバット」

俺たちが到着すると、その中の隊長らしい人が前に出てきた。

「すまんな、ガラパゴスアオアシカツオドリ」

「えっ？ ガラパゴスアオアシカツオドリさんなの？ うわあ、見れないのが残念だよ。悔しいよ。もう一度、蟲(ベステート)が出てこないかな……」

キヨカは、とんでもない事を口走りながら、本気で悔しがっている。

なんなんだ？ ガラパゴスアオアシカツオドリって。まあ、名前からして、脚が青いんだろ うなってわかるけどな。だが、どういう鳥なのか想像できない。カツオドリってどんなんだ？ それにしても、青い脚か……珍しいよな。でも、ちょっと不気味かも。

それにしても、ガラパゴスって名前にいい印象がないのは、ガラパゴスペンギンのせいだよな。それだけで、信用できないって思われる。

ガラパゴスアオアシカツオドリって、どんな鳥なんだろうな。キヨカとは違う意味で見たい。元の世界に帰ったら、動物の図鑑とか買おうかな。さすがに、全部が動物園にはいないだろうからな。この国だけで、色々な動物の名前を聞いたな。一応、記憶に残っているものは、ノートに書き記してあるが、それ以外にも忘れてしまったものが多い。改めて、様々な種類の動物がいる事を知ったね。俺たちが知ってるものなんて、わずかしかないんだな。まあ、キヨカは出会った全てを知っていたわけだけど。

「今日は、無理を言ったな」

「なにを言う。これこそ、保安局の仕事だろう」

「だが……」

「大丈夫だ。きちんと申請して、許可は得ている。ここにいる全員、熱い志を持っているんだ」

「それならいいけどな。とにかく、今日はよろしく頼む」

「ああ。……ところで、そっちは？」

「ああ、こちらが今回の依頼人だ。一緒に捜査もしてな。今日も同行する」

そう紹介され、ガラパゴスアオアシカツオドリさんがこちらをギロっと見る。

俺たちには、そのガラパゴスアオアシカツオドリではなく、普通の人間に見えているので、なんとその視線が怖い。

ガラパゴスアオアシカツオドリさんは、面長で目が細いので、余計にそう感じるのだろう。

「よろしくお願いします」

そう言って、俺たちは挨拶する。

「本当に大丈夫なのか？」

まあ、どう見ても素人の俺たちも同行するってのは、誰だって不安を感じるだろうな。

「ハリオアマツバメさんとオカピさんは大丈夫だよ。僕がフォローするさ」

「それならいいけどな。どのみち、強行突入する場合には、こちらが先頭だしな」

「そこは期待しているよ」

「現場の状況次第だな。時間がもったいないな。現場に急ぐぞ」

「そうだな」

と、ガラパゴスアオアシカツオドリさんの言葉を合図に、全員が走り出す。俺たちは、置いて行かれないように走る。

目的の場所は、ウォンバットさんとハリモグラさんしか知らないなので、二人が先導する。

それにしても、くそ重い荷物があるのはきついな。トロリーバッグでも、荷物自体が重いからな。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

俺たちにすれば完全な強行軍だ。この荷物は、重装備みたいなものだ。

そのまま森の中を走るの、本当につらい。道が悪い場所なので、何度も手伝ってもらってやっと進めた。

この時点で、完全に足手まといだ。なにが大丈夫、だよ。

そんな状態でなんとか到着したその場所は湖だった。

「すごいね……」

こんな場所があったのか。キヨカも俺も、思わず感動してしまった。

森の真ん中にある憩いの場って感じだ。

畔にはコテージがあれば最高だろうな。

「あそこが、目的の場所だ」

ウォンバットさんがガラパゴスアオアシカツオドリさんに説明している。

その先を見ると、そこには理想的なログハウス風のコテージがあった。

「あそこか。中の様子がわかりづらいな」

「そうなんだ。意図的なのか、窓が作られていない。だが、不審な連中があの中に入ったのは確実だ」

そのコテージは、せっかくの景観を楽しもうというつもりがないようで、一切の窓がない。まさに、丸太を組み合わせて、形を作っただけといった感じだ。

「お前がそう言うなら間違いないだろう。だが、やはりタイミングが難しい。そもそも、その連中が今あの中にいるのか、確認のしようがなさそうだ」

「……………それはすまん」

「いや、ずっとここで見張っているというのは、個人では難しいさ」

ガラパゴスアオアシカツオドリさんは、部下の一人に偵察を指示する。

「やっぱり、なんの動物さんかわからないのは哀しいね」

キヨカはそればかりだな。こいつは、この世界の状況を楽しんでいたからな。

偵察に向かった人たち以外は、ぎりぎりコテージが見える場所に身を隠す。

しばらくして、偵察の人が戻ってきた。

「確かに誰かがいるようです。ただ、数は不明です」

「そうか。ウォンバット、どうする？」

「そっちが大丈夫だと思えば、僕はそれに従うよ」

「責任転嫁か？ ……まあ、主導がこっちの方がいいんだがな」

「だろ？ だから任せるよ」

「わかったよ。準備をして、各位置で待機」

そう言うと、それぞれがコテージから一定の距離を保ちつつ、四方八方に散らばる。その手には、警棒のようなものを持っていた。

日本の警察の装備を知っていると、なんとも頼りないものなんだが、この国ではこれが普通な

んだらう。

ファンタジーな雰囲気だが、剣もなければ銃もない。せめて弓矢くらいあってもいいと思うんだけどな……。

もちろん、トランシーバーもないので、散らばってしまうと連絡がとれない。

しかし、そこはさすがというべきか、簡単な合図で全員の行動は一致する。

コテージを見ていたガラパゴスアオアシカツオドリさんが、サッと手を挙げると、コテージの周囲に待機していた全員が、一斉にコテージに突撃する。

正面にいた人は、ドアをぶち破る勢いで突っ込んでいく。

やはり施錠されているようで、ドアを破壊していた。

それにしても、破壊する時も、その前の突撃する時も、大きな声を出していたし、破壊音も大きい。

これだけ大きな音を出せば、相手に気付かれるだらう。

やっぱり、この国の警察はどうなんだろうな。その辺がわかってないのか。ちょっと不安になってきた。

ぶち破ったドアから、次々と突入していく。外からじゃよくわからないが、中では大暴れしているようだ。ドタドタと大きな音が聞こえてくる。

中にいるであろう連中はどうなってるんだらうか。あの状態だし、逃げ場はないだらう。

「思ったよりも簡単だったようだな」

「……どうだろうな」

ガラパゴスアオアシカツオドリさんは、完全に制圧したと確信しているようだが、ウォンバットさんはそうではないらしい。なにかあると思っているのか。

しばらく騒がしかったのだが、すぐに静かになった。

静かになると、中から一人が出てきた。そして、慌ててこちらに向かってくる。

「どうしたんだ。確保できたのか」

「それが、誰の姿もありません」

「どういう事だ。事前の偵察では、確かに誰かがいると」

「はい、確かに誰かがいたようです。しかし、我々が突入した時には、蛻の殻でした」

どこから逃げたのかはともかく、あれだけ大きな音を立てて突入すれば、普通はどこかへ隠れるなり逃げるなりするぞ。それを、真剣に不思議がってるってのは……やっぱり大丈夫なんだろうか。

「本当に誰もいないのか」

「はい。家財道具の中や裏なども搜索しましたが、誰も潜んでいませんでした」

どうやら、さっきの騒いでいたような音は、その音だったらしい。

それにしても、どっちが悪党かわからないぞ。

「ウォンバット、どうする？」

どうするもなにも、逃げたのなら追わないとダメだらう。

「そうだな……。本当にくまなく探したのか？」

「当然です」

「しかし、あそこから脱出したような形跡はない。その前の偵察では、確かに中にいた……。つまり、まだどこかに潜んでいるか、どこかに隠し通路があるか、どちらかだろうな」

まだウォンバットさんはまともだな。

「ここは、僕たちが調べてみよう」

「そうか」

「だが、調べている間、僕たちが襲われないよう、護衛を頼めるか？」

「わかった。気を付けてくれ」

「……そういうわけで、ハリオアマツバメさんとオカピさんも来るかい？」

「当然です」

「そうだね。私も行くよ」

行かないわけがない。

これまでの事を見ていて、この人たちには任せられないってわかったからな。俺たちの常識を押しつけるわけじゃないけど、これはどう考えてもおかしいだろ。

「それじゃ、行こうか」

俺たちは、コテージに近付いていく。

もちろん、全ての荷物を持ってだ。これがまた大変だった。でも、ここに置いておくわけにはいかない。

「ちょっと待ってくれよ」

「オカピちゃん、もっと早くしてよ」

「無理言うな。こっちは、お前のと違って、重いんだよ」

スパイス分だけ重い。つうか、それが全てだ。

「情けないな……」

「ボクがお手伝いします」

と、ハリモグラさんが手伝ってくれた。かなり助かった。

そうしてコテージの前に着くと、そこは荒れていた。

「すごいね、これ……」

「ああ、無茶苦茶だな」

コテージのドアは、見事なまでに破壊されていた。もうちょっとなんとかならないものか。しかも、ドアだけじゃなく、周辺も破壊しているので、修理は簡単じゃないだろう。

「入ろうか」

ウォンバットさんを先頭に、俺たちはコテージの中に入る。

中は、保安局の人たちがいっぱいだった。

ガラパゴスアオアシカツオドリさんに連絡に来た人が、指令を伝える。

それを聞いた人たちは、数人を残してコテージを出る。残った人たちは、俺たちを囲むように移動する。

「さあ、なにか手掛かりがないか探そうか」

なんだか、物々しすぎて落ち着かないが、この人たちが見てくれている間は、手掛かりを探す事に集中できるのでよしとしよう。まあ、信用できるかは謎だが。

中から見ても、壁になにか細工できるようには思えない。外から見た感じと、広さは変わらないように思える。

だとすれば、なにかあるなら床だ。

床になら隠し部屋や隠し通路を造れるだろう。

それは、みんな同じ考えだったらしく、キヨカも、ウォンバットさんとハリモグラさんも、まず床を調べている。

このコテージは、それほど広くはなく、ダイニングキッチンと、他に部屋が二つあるだけだ。今は、その部屋のドアは破壊されている。やりすぎじゃないだろうか。

とりあえず、俺たちは全員で、ダイニングキッチンの床を調べている。

報告があったように、家財道具も調べたらしく、チェストなどの棚が散乱している。

空き巣に入られたみたいだな。

それもそうだし、家具が散乱しているので、それが邪魔をして調べにくい。

何度もそれらをどける作業をしないといけなかった。

「オカピちゃん、あれなんて怪しいよね」

ダイニングには、暖炉が設置されていた。キヨカはそれを指しているようだ。

「……確かに。あの中って、なにかあるかもな」

今は使っていないらしく、灰もなにもない状態だ。

「調べてみるね」

「頼む」

キヨカが暖炉を調べている間、俺はまだ調べていない隣の部屋に向かう。

「オカピちゃん、こっち来て」

これから調べようとした矢先、キヨカに呼ばれた。

「どうしたんだ？」

なにか見つけたのだろうか。キヨカがいる暖炉に急ぐ。

「なにかあったのか？」

「うん」

キヨカは、してやったりという顔をしていた。

「ほら、これ見て」

そう言うと、キヨカは暖炉の横を触る。

「うおっ」

と、暖炉の壁とでも言うべき部分が奥にずれた。

「隠し通路だよ」

そこには、人が一人這った状態でようやく通れそうな通路があった。すぐに下に向かっているらしく、梯子が見える。

「やったな」

「でしょ。褒めて褒めて」

「おお、すげえぞ」

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

早速、キヨカはこれをウォンバットさんに報告する。

「お手柄ですね」

「本当です。素晴らしいです」

ハリモグラさんも賞賛する。

そう言われて、キヨカは照れまくっていた。まあ、今はしょうがないだろう。実際、これはキヨカのお手柄だ。

「これを保安局に伝え、ガラパゴスアオアシカツオドリにも連絡しましょう」

「このまま、俺たちだけで行きましょう。護衛をつけてくれれば、なんとかかなりますよ」

これ以上、保安局を信用できそうになかった。ただ、さすがに四人では危険なので、多少の護衛は欲しい。

「……しょうがないですね。それでは、伝令は頼みましょう。そうしてから、僕たちで向かいましょうか」

俺は大きく頷く。

早速、ウォンバットさんは、保安局の人にその事を伝える。

「それでは、保安局が先導と最後尾につきます。それでいいですか」

「わかりました」

ウォンバットさんの判断なら信用できる。それが一番安全だろう。

「それでは、行きましょう」

まずは、保安局の人が中に入って、そして梯子を下りていく。それに続いて、ウォンバットさんが。その次に俺。そしてキヨカと続く。その後ろには、ハリモグラさん。最後に保安局の人。

その隊列で、俺たちは梯子を下りていく。

梯子を下りると、そこは広い空洞だった。空洞が横に続いている。立っても大丈夫なくらいの高さがある。よくまあ、こんなものを造ったものだ。

しかし、暗いために先が全く見えない。この通路には照明がない。

ここにきて、失策というか、ウォンバットさんたちは照明を持っていなかった。

「オカピちゃん、これの出番だね」

と、キヨカがトロリーバッグの中から懐中電灯を取り出す。

「だな」

これこそ文明の利器。ここで使わずしてどうする。ちなみに、シャコシャコと振れば充電できるタイプなので、電池切れの心配がない。

俺たちは、それぞれ点灯させる。

「おおっ、なんですか、それは」

ウォンバットさんをはじめ、ここにいた全員が懐中電灯を見て驚く。どうやら、この世界にはないようだ。

そういえば、この国に来て、機械らしきものは見ていない。

「まあ、こういうものです」

説明が面倒だ。それよりも、俺は自分の携帯が気になる。

説明もせずに、すたすたと先を急ぐ。

「結構長いね」

すぐに終わるかと思った道が、ずっと先まで続いている。

この道を使ったなら、もうとっくに逃げてしまっているだろう。

問題は、この先がどうなっているか……だな。まさか、この先が部屋になっているとは思えない。おそらく、外に繋がっているんだろう。

そこがどこか。

だけど、それがどこでも、結局逃げているわけだ。

俺たちの存在というか、保安局の介入は知られてしまっている。

連中がこのまま、この街に留まる理由はない。俺がその立場なら、どこか別の場所に逃げて、ひっそりと隠れて住むね。

やっぱり、初動が悪い。相手に気付かれるような行動をした保安局は、やっぱりあり得ない。

ちょっと待てよ。

もしかして、これは保安局がわざと逃がそうとしてるんじゃないのか？

保安局がグルだとしたら……。

保安局の隊長は、ガラパゴスアオアシカツオドリだ。ガラパゴスペンギンとの繋がりを考えてしまう。

本当に信用できるのか？

そのガラパゴスアオアシカツオドリに依頼したのはウォンバットさんだ。もしかして、ウォンバットさんも……？

よくない方に考え出すと、どこまでも考えてしまう。

「どうしたの？」

キヨカが顔を覗き込んでくる。

「あ、いや、なんでもない」

「嘘だね」

「本当だっけの」

「嘘だ」

断言されるとな……。まあ、キヨカにはバレバレか。

「ちょっと、今の状況について考えてたんだよ」

「もしかして、ガラパゴスペンギンさんたちと、保安局の癒着とか？　さらには、ウォンバットさんも茶番劇を演じてるだけとか」

おいおい、こいつはエスパーか？　俺が思っていたそのままだぞ。

「ビンゴだね。ってというか、オカピちゃんってわかりやすすぎだね」

「どうしてわかったんだ？」

「どうしてもなにも、私も考えてたもん。どう考えても、これって逃げられてるパターンだよな

。でもって、保安局が乗り込む時にあんな事をしたもん。中の人たちに知らせてたんじゃないかって、思っちゃうね」

「でも、前の夜に伝えておくって事もできないか？」

「それもできるかもだけど、それができなかったから、突入の時だったって事もあるよね」

「そうだな」

キヨカの考えはもっともだ。

ただ、全てなんの確証もないけどな。

「そういうわけで、オカピちゃんも疑っているみたいでよかったよ」

「それっていいのか？」

「いいんだよ。平和呆けしてなければいいんだよ」

「そういう事にしておくよ」

そんな会話をしていると、出口らしいものが見えてきた。

もう、かれこれ五分は歩いたんじゃないだろうか。やはり、出口は部屋じゃなく外だった。

俺たちは外に出る。

「ここは……どこだ？」

ウォンバットさんたちが場所を確認する。俺たちは、全然土地勘がないのでわかりようがない

。

しばらく周囲を調べて、どの辺りかの見当はついたようだ。

「ガラパゴスアオアシカツオドリに連絡を……といっても、ここからだ時間が掛かるな」

ウォンバットさんは、しばらく考え込んでしまう。

「どっちの方へ行ったかとか、推測できますか？」

時間が惜しい。ここで立ち往生している場合じゃない。

「そうだな……。ここからだ、街の中心へは……」

「国の外へは、ここから近いんですか？」

キヨカが被せるように訊く。

「国の外？ どうしてまた」

「いいから、教えて下さい」

キヨカも切羽詰まっているというか、今の状況に苛立っている感じだ。

「その林を抜ければ、国外への門がある。それがどうか……」

キヨカは、ウォンバットさんの言葉を聞き終わらないうちに走り出す。俺も遅れないように走る。

「ちょ、ちょっと、君たち……」

背中から声が聞こえるが、俺たちはそれを聞いている余裕はない。このままだと、ガラパゴスペンギンたちは、まんまと逃げおおせてしまう。それだけは阻止しないと。

「トールちゃん、急ごう」

「おうよ」

言われるまでもない。

このまま、逃がすつもりなんてない。

ここまできたら、本気で風伯と蜘蛛(アラネーオ)を使ってもいいかもなんて思えてきたぞ。

そうだよ。俺たちには戦力がある。まあ、それを対人に使っていいのかは別として。

「待ちなさい」

と、後方からウォンバットさんたちが追いかけてくる。しかし、そこにハリモグラさんの姿はない。追いかけてくるのは、ウォンバットさんと保安局の人が一人だけだ。

「きっと、伝令のために残ったんだろうね」

「そうだな。もしくは、別方向から向かっているか」

「それはないと思うな」

「俺も、自分で言ってそう思う」

おそらくだが、保安局のもう一人は、ガラパゴスアオアシカツオドリさんに連絡に向かったんだろう。そして、ハリモグラさんは、あそこに残って、後続に連絡する役目なんだろう。

だけど、もう俺たちにはそんなのは関係ない。この国の人を信用できないと思った瞬間から、自分たちでなんとかするしかないとした。

こういう時は、キヨカの性格に感謝だな。じいさんに鍛えられてたわけだし、そもそも突飛な行動はこいつの十八番みたいなものだ。機転も利くし……。そう考えれば最高のパートナーなんだな、旅のだけど。

俺たちは、追いかけてくる二人の事は、全く気にしない事にして、おそらくは先にいるであろうガラパゴスペンギンたちを追いかける。

「助力しよう、」

と、急に蜘蛛(アラネーオ)が話し掛けてきた。普段はあまりないので、俺もキヨカも驚く。

「アーちゃん、どうしたの？」

「汝たちは 目を失っている 我が一時 汝たちの目を戻そう、」

目を失った？

わけがわからんが、詳しく聞いている余裕がない。

「わかった。よくわからないけど、お願い」

キヨカも余裕がないのは一緒だ。とにかく、助けてくれるってんなら、お願いするでしょう。なにをしてくれるのか、よくわからないけど。

林を抜けると、大きな城壁が見えた。

どうやら、これがこの国の端らしい。

「トールちゃん」

キヨカが先にそれを見つけた。

城門らしい場所に、見覚えのある人たちがいた。

ガラパゴスペンギンにアマゾンカワイルカ、それにユーラシアカワウソとヤク。

……ちょっと待て。どうして、俺たちにあの人たちがわかるんだ？

俺たちは、蟲(ベステート)を封印したから、この国の人たちが着ぐるみじゃなく、本来の姿で見えているはずだ。なのに、今は着ぐるみ姿の時と同じように見える。

「他にもいるね」

確かに、他にもいるようだ。しかし、俺には名前はわからない。

「ミーアキャットさんに、カクレクマノミさんに、ピラニアさんもいる」

まあ、カクレクマノミは知っていたが、他のがそうなのか。聞けば名前だけは知ってるな。

どうやら、その七人で全員のような。もっとも、他に内通者や共犯者がいなければだが。

「急ぐぞ」

「うん。それにしても、どうしてまた見えるんだろう？」

キヨカも気になっているようだ。ちなみに、俺たちは元のままだ。キヨカはハリオアマツバメに見える事はない。

「もしかして、さっきアーちゃんが言ってたのって……」

「……そうか、この事か」

失った目というのは、こういう事なのか。

確かに、ガラパゴスペンギンたちの本来の姿を知らない俺たちには、絶対に見つける事ができない。なので、蜘蛛(アラネーオ)が一時的に俺たちが知っている姿に見えるようにしてくれたって事か。

そういう事にすら気付かなかった。

俺たちは、どうやって探すつもりだったんだろうな。

本気で余裕がなかったんだな。

「蜘蛛(アラネーオ)、サンキュな。お蔭ですんなりいけそうだ」

「アーちゃん、ありがとね」

俺たちは蜘蛛(アラネーオ)にお礼を言う。ホント、蜘蛛(アラネーオ)には助けられっぱなしだな

。

このまま国外に出られたら面倒だ。この外がどうなっているのかわからない。

「でもさ、トールちゃん」

「なんだ？」

「とりあえず、このまま外に出させるってのもありじゃない？」

「どうしてだ？ このままだと逃げられるだろ」

「そうだけど。この国から外に出たら、この国の法律……って、そういうのがあるのか知らないけど、そういうのが関係なくなるでしょ」

「なるほど」

確かにそうだ。

この国の法律は知らないが、法を犯すってのはよくないよな。

「まあ、それもあるけど、いざとなったら『時の口』で逃げればいいんじゃないか？」

「それもそうだね。蟲(ベステート)は封印してるから、ここにいなくてもいいもんね。……でも、私とトールちゃんが離ればなれになったら……」

「そうされる前に逃げればいいさ」

「だね」

俺たちは顔を見合わせてにやりと笑う。

「で、どっちにするの？」

「そりゃ、とっ捕まえるさ」

「やっぱりそうするんだ」

わかってたくせに。このまま、国外退去されても困る。こいつらには、この国の中にいてもらわないとな。

ラストスパートだ。このまま、一気に城門へ。

だが、ここの保安局のような事はしない。気付かれたらまずいからな。

それでも、気が逸ってしまう。

そのせいか、外へ逃げようとしていたカクレクマノミに見つかってしまった。

本来の姿だったら大丈夫だったのに、向こうには俺たちはオカピとハリオアマツバメに見えるんだよな。

「おい、あれって……」

それをきっかけに、全員が俺たち気付いた。特にバツの悪そうにしているのは、アマゾンカワイルカとガラパゴスペンギンだ。この二人は、俺たちと直接会ってるしな。

「おい、逃げるぞ」

「おう」

と、国外への出国申請を終えたらしい一行は、慌てて走っていく。

「行くぞ」

「うん」

俺たちもそれを追おうとしたが、門番(ポーディスト)に止められてしまう。

「申請書を記入して下さい」

ちくしょう。そもそも、入国だって手続きをしていないってのに。よく考えれば、俺たちは不法入国者なんだよな。この状況だと、俺たちが犯罪者だ。

「あいつらを追わないといけないんです。通して下さい」

「通してよ。逃げられちゃう」

そんな俺たちの抵抗も虚しく、門番(ポーディスト)たちが総出で俺たちを足止めする。

「君たち、なにをしてるんだ」

そこへウォンバットさんが到着した。

これは利用させてもらおうか。保安局もいるし。

「あいつらが外に逃げたんです」

目の前を逃げているその後ろ姿を指す。

「本当か……」

ウォンバットさんが目を凝らして見る。

「確かに、あの連中だ」

「わかったでしょ。だから、俺たちを外に出して下さい」

「……すまんが、それはできないんだ」

「どうしてですか」

この先は国外だ。国外に僕たちの権限は及ばない。それは保安局も然りだ」

「じゃあ……」

ウォンバットさんは首を振る。

「この状況をどうしてあげる事もできない。できるのは、君たちが正規の申請をして、外に出る事だけだ」

なんてこった。こういう時だけ融通が利かないのか。

「ウォンバットさん、今までのお金はいくらですか？」

「……はあ？」

あまりに突然の言葉に、ウォンバットさんはあぐりと口を開ける。

「だから、私たちはこのまま追います。もう戻らないと思います。だから、今までの調査費の精算して下さい」

まったく、キヨカも生真面目というか……。こういうのはきちんとしておかないと気が済まないんだよな。

「早くして下さい。逃げられてしまう」

戸惑っているウォンバットさんを急かせる。

「え、えっと……全部で四〇〇〇〇 s t e l o だな」

「わかりました」

そう言って、キヨカは財布から四〇〇〇〇 s t e l o を取り出す。

「これでいいですよね」

あ、ああ……と、どうしていいのかわかっていないウォンバットさんにそれを押しつける。

「トールちゃん、アーちゃんに頼むよ」

マジかよ……。

だが、それが一番かもな。

「わかった。頼む」

キヨカは門番(ポーディスト)に押さえつけられながら、左手の白いオープンフィンガーグローブを外す。

「アーちゃん、お願い」

そして、門番(ポーディスト)である蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

「うおっ！」

「うわあっ！」

俺たちを押さえつけていた門番(ポーディスト)たちはもとより、ウォンバットさんたちも、突然の出現に驚き離れていく。

「アーちゃん、あいつらを追って」

「了承した、

俺たちは当たり前のように蜘蛛(アラネーオ)に乗る。

俺たちが乗った事を確認した蜘蛛(アラネーオ)は、城壁に糸を吐きかけ越えていく。

これって、ある意味反則だと思うが、こうなったらやるしかない。ああ、どこまででもやってやるさ。

国の外は、草原が広がっていた。周りに山もないので、地平線が見渡せる。雄大な光景は見応えがあるのだが、今はそういう余裕が一切ない。

それにしても、さすが蜘蛛(アラネーオ)だろうか。その大きさ故に、すぐに追いついた。

追いつかれた方は、想定外の事に驚き、中には腰を抜かして座り込む人がいる。これが普通の反応だろう。なにせ、こっちは三メートルはあろうかという巨大な蜘蛛(くも)に乗ってるんだ。後ろめたくなくても離れていくよな。

「見つけたぞ！ 俺の携帯を返してもらおうか！」

蜘蛛(アラネーオ)の上から叫ぶ。

ガラパゴスペンギンたちは、逃げる気も失せたのか、恐怖のあまり動けないだけなのか、まあ後者だろうな。

「オカピちゃんの携帯、ちゃんと返してよね」

俺たちがいくら言っても、この人たちは無反応だ。なんだか、気絶してる人まで。たとえばヤクとかな。

「なあ、なんだかやりすぎたんじゃないのか？」

「そりゃそうかもしれないけど、いいんじゃないの」

気にするような相手じゃないか。

「とにかく、取り戻そうか」

キヨカはするすると降りる。

「そうだな」

俺はというと、すげえぎこちない。

「ありゃりゃ……完全にダメっばいね」

腰を抜かしているガラパゴスペンギンたちの前に立つ。

「確かにな……」

上からだとわかりづらかったが、全員が放心状態だ。こりゃ、逃げるなんてできるわけないか

。

「トールちゃん、やっちゃおうか」

なにを？ と訊く前に、キヨカは荷物を漁り始めた。

おい、と止めようと思ったけど、遠慮してる場合じゃないもんな。俺も荷物を漁る事にした。

そもそも、俺の携帯だしな。

俺たちは、それぞれの荷物を勝手に漁っていく。

俺はアマゾンカワイルカの荷物を、キヨカはガラパゴスペンギンの荷物を漁る。しかし、どちらにも俺の携帯はなかった。

今度は、俺はユーラシアカワウソの荷物を、キヨカはヤクの荷物を漁る。

「ないね、トールちゃん」

「そうだな」

どちらにも俺の携帯はなかった。

誰が持ってるんだ？

「次は、ピラニアさんのをお願いね。私はカクレクマノミさんのを探すから」

「ああ」

今度こそ見つかってくれよ。

そう願いながら、俺たちはそれぞれの荷物を漁る。

「……………ないね」

「……………だな」

どうなってるんだ？

「最後は、ミーアキャットさんだね」

「だな」

最後に残ったミーアキャットの荷物を漁る。ここにあるはずだ。つうか、ないと困るんだよ。

しかし、無情にも携帯は見つからなかった。

「どういう事だ？」

「どうしてかな。だって、ガラパゴスペンギンさんたちが……」

と、そこまで言って、キヨカは言葉を詰まらせた。

「もしかして、私たちの勘違いだった？」

「いや、それはないだろ。でなきゃ、ガラパゴスペンギンたちが逃げた理由がない」

「そうかな……。追いかけていたら……」

「俺たちは、気付かれないようにしていたし、ただ走っていただけだ。だから、自分たちが追わ

れているなんて……」

「でも、ガラパゴスペンギンさんは、私たちに尾行されてたんだよ。だから……」

「そうだった。そのせいで、俺たちを見て逃げる理由があるのか」

「そうだよ。あそこから逃げたのだから、保安局が押し入ってくれば、誰でも逃げるでしょ」

「それもあるな。だが、あの通路はどうなんだ？」

「それは……」

「あの通路は、確かになにかを企んでいたわけだろ」

「そうだね。普通の家に、あんなものないよね」

「だろ？ やっぱ、なにかに関わっていたのは確かだ」

「じゃあ、トールちゃんの携帯はどこなんだろう？」

俺たちは腕を組んで考え込む。

確かにこの連中はなにかを企んでいた。それに、後ろめたい事もあったはずだ。

だが、俺の携帯は誰も持っていなかった。

つまりどういう事だ？

落ち着いて考えろ。

ゆっくりと状況を整理しよう。

この人たちは、なにかしらの犯罪に関わっていた可能性が高い。

しかし、俺の携帯を盗んだ犯人じゃないっぽい。

だったらなんなんだ？

この連中が逃げたのは、俺たちが追いかけていたから……。

「あっ」

「どうしたの、トールちゃん」

「可能性なんだが、こいつらが逃げたのって、俺たちの後ろにいた保安局の姿を見てじゃないのか？」

「……………」

キヨカはしばらく考え込む。

「そうかもしれないね。保安局に追われていると思って——実際、追われてるわけだけど、それで逃げた可能性があるよね。それに、保安局がグルだったら、逃げるように指示したって可能性も」

「さすがにそこまでは考えてなかったな」

保安局が指示したとは思いつかなかった。だけど、この状況ならあるかもな。

「どうなんだろうね」

「真相か？ やっぱ、戻るか？」

「ここにトールちゃんの携帯がないなら、戻って探すしかないんじゃないの？」

「だけど、これで手掛かりがないぞ」

「あるよ。あの小屋に、この人たちが入っていった建物。あそこは、ウォンバットさんもわかるよね」

「確かに。その可能性に賭けるしかないか」

犯人だと思っていたガラパゴスペンギンたちが持っていなかったわけだし、隠れ家に隠して……。いや、それはないだろ。この世界にない貴重なものだ。どこかに置いていくわけがない。

ほとぼりが冷めた頃に戻ってこようとしたとか？ いいや、それも考えにくい。あの小屋ももう一つの場所も知られているわけだから、そういう事はしないだろう。搜索をされれば発見されるはずだ。それとも、それができないくらい、この国の保安局は無能なんだろうか。

「とにかく戻ろう」

「そうだな……って、俺たち、簡単に戻れるかな」

「そうだったね」

俺たちは、門番(ポーディスト)たちを振り切って出てきた。あの国にすれば、俺たちは逃亡犯だろう。犯罪者が戻ってくれば、間違いなく拘束されるはずだ。

「危険でも戻ろうよ。トールちゃんの携帯を取り戻さないよ」

「キヨカ……」

ちょっと感動。ここまで、俺の携帯のために。もう、こういう状況だし、俺が携帯を諦めれば終わるんだよな。

「トールちゃん、携帯を諦めようとか、そんなの絶対に赦さないよ。なにがなんでも取り戻すんだから」

「でも……」

「赦さないんだから。取り戻すったら取り戻すの」

意地になっているだけかと思われるかもしれないが、キヨカは真剣だよな。

「わかったよ。キヨカが諦めないのに、俺が諦めたらダメだよな」

「わかればよろしい。というわけで戻るよ」

俺たちはもう一度蜘蛛(アラネーオ)に乗る。

「アーちゃん、お願い」

「了承した、

俺たちを乗せて、蜘蛛(アラネーオ)はもう一度あの国に戻っていく。

俺たちが戻ってきた事で、城壁付近は騒ぎになっていた。まあ、そりゃそうか。俺たちが戻ってきたって事もあるけど、巨大な蜘蛛(くも)が迫ってくれば騒ぎにもなるだろう。襲撃されると思っても不思議じゃない。攻撃されないだけマシだろう。

俺たちは、城壁を乗り越えて中に入る。これで、堂々とした不法入国者だ。

「君たち、どうして……」

戻ってきた俺たちを見て、ウォンバットさんは茫然とする。そして、その手には、俺たちが探していたものがあつた。

「……………」

俺は言葉が出なかった。

「ウォンバットさん、どうしてそれを持ってるの？」

キヨカはなんとか平常心を保っていた。それでも、動揺しているのがわかる。

「まさか、ウォンバットさんが……」

ここで、ウォンバットさんが取り戻してくれたなんて、そんな風には思わない。それなら、こうなる前に渡すだろう。

それなのに、今こうしてあるという事は、俺の携帯を盗んだのが、ウォンバットさんだという事だ。

つまり、今までの全てが演技だったというわけか。

俺たちは、茶番劇に付き合わされた……と。

「こ、これはだね、僕たちが見つけて……」

「返してくれ」

ウォンバットさんの……いや、ウォンバットの言葉なんて、なにも聞きたくなかった。

まさかの事に動揺しているウォンバットの手から、俺の携帯を奪い返す。

こっちだって、思わぬ展開に動揺してるんだ。

まさか、あれだけ真剣に探してくれていたウォンバットが犯人だったなんて。今でも信じられない。これこそ、信じたくない。

「ハリモグラさんも、知っていたんですか？」

「……………」

キヨカの質問に、ウォンバットは無言を貫く。

ハリモグラさんがどうだったのか。知っていたとすれば、とんだ食わせ者だ。

できれば、知らなかったと思いたい。

「……………彼は知りませんよ」

ゆっくりと、ウォンバットが言葉にした。

それが本当かどうかは確かめられない。これをハリモグラさんに訊けば、きっと知っていたと答えるだろう。だから、俺たちはこの言葉を信じるしかないし、この言葉を信じたい。

「トールちゃん、行こ」

キヨカが俺にだけ聞こえるように言う。

「そうだな」

俺たちはウォンバットたちに背を向ける。

誰がどういう意図で、この茶番に関わっていたのかわからない。この国全てなのかもしれない。だけど、俺たちはそれを解明できないし、正すなんてできるはずもない。そのつもりもない。この国は、俺たちにとっては泥棒の国だ。旅人にとっては、とても危険な国だ。それだけだ。どう取り繕っても、俺たちの印象は変わらないだろう。

「じゃあ、俺たちは行きます」

携帯を取り戻して、ここでの用件は全て終わった。

後味の悪い記憶しか残らないだろう。

「アーちゃん、戻って」

キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を戻して、再び白いオープンフィンガーグローブをはめる。

「トールちゃん、もういいよね」

「ああ」

これ以上、この国にいるつもりはない。

「キヨカ、頼む」

「うん」

キヨカの顔も暗かった。

あれだけ親切にしてくれた人が犯人だった。俺たちは、なにを信じればいいのかかわからない。この国で俺たちは、信じるという気持ちを失ったようだ。

楽しいと思えた旅だったが、こんな序盤でこういう事になるなんて。

物語は全てがハッピーエンドじゃない。バッドエンドだってある。今回は、まさにバッドエンドだったんだろう。

この先、こういう出来事にまた遭遇する事があるかもしれない。その時は、同じ過ちを繰り返したくない。

言い換えれば、俺たちはここでいい勉強をしたのかもしれない。

なんだかんだで、俺たちは平和呆(ぼ)けしてたんだろう。

親切そうな顔で近付いてくる人を、そのまま信用してはいけない。

ここは、俺たちが知っている世界じゃない。なにがあっても不思議じゃない。

俺たちの常識なんて、通じるはずがないんだ。

でも、どこかで人を信じたいという気持ちはある。その気持ちを完全に失くしたくない。

「さよなら」

これは、この国への決別の言葉だ。

「バイバイだね」

そう言って、キヨカは『時の口』を作る。

振り返るつもりはない。

俺たちは、この国に背を向けたまま『時の口』に入った。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて ーぐるみんー ㊦

<http://p.booklog.jp/book/48948>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48948>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48948>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ